

平成 21 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18401024  
 研究課題名（和文）東アジアにおける韓国出土木簡の地域的性格  
 研究課題名（英文）The regional property of the writing tablet excavated in Korea

研究代表者  
 李 成市（Lee, Sungsi）  
 早稲田大学・文学学術院・教授  
 研究者番号：30242374

## 研究成果の概要：

咸安・城山山城から出土した木簡を高精度デジタルカメラで撮影をおこない、データベースを構築してWEB上で閲覧できるように公開した。同木簡の調査をおこない、正確な釈文と製作技法の復元をおこなった。こうした成果を報告書にまとめ韓国と日本で刊行した。扶余・双北里木簡の調査をおこない、書式や用語法が日本の出挙木簡と共通することから、百済が古代日本の文字文化に与えた影響を明らかにした。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,500,000	0	2,500,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	7,620,000	1,530,000	9,130,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：古代朝鮮、出土文字資料、木簡、東アジア、新羅、百済、出挙

## 1. 研究開始当初の背景

従来、日本の木簡は、中国大陸で出土した簡牘との比較が試みられながらも、対応関係はほとんど見出せなかった。それは、日本と中国とでは木簡が使用された時期に数百年もの時間差があるためである。すなわち、30万点ほどにもなる日本の木簡は、最も古いものでも7世紀初頭ころであり、6

世紀にさかのぼるものは一点も発見されていない。一方、中国において竹簡・木簡が主たる書写材料として使用されたのは漢代までであり、魏晋代は紙と木を併用するいわゆる紙木併用時代となり、紙の普及とともに木簡の使用はしだいにみられなくなる。現在までに出土した木簡による限り、日本と中国における木簡使用の年代は、200年以

上も間隔があいているのである。そのため比較研究には自ずと限界があった。

そこで、注目される資料が韓国で出土した木簡である。これまでのところ、韓国出土木簡のもっとも古いものは、6世紀前半にさかのぼる扶余・陵山里寺跡から出土した百濟木簡である。また、新羅においても、6世紀半ばには咸安・城山山城にみられるように、広範に使用されたことが明らかとなっている。これらの木簡は、年代的に中国簡牘と日本木簡の中間にあたる。さらに、地理的にも、朝鮮半島は中国大陸と日本列島の間にあることから、韓国木簡が両者をつなぐ役割をしたことは明白である。朝鮮半島で出土した木簡は、現在までわずか数百点ほどしか報告されていないが、日本出土木簡と形状や内容が酷似しているものが数多くみられ、明確な対応関係が確認できる。高句麗、百濟、新羅において受容され、変容を経た文字文化が、日本に伝わったと考えられる。

こうした木簡伝播のモデルは、次のように図式化できる。

中国(A) 朝鮮(A' B) 日本(B' C)

すなわち、中国(A)と日本(C)を比較しても類似点が見いだせないが、朝鮮半島出土の木簡(B)が発見されることによって、その関係性が明らかになりつつあるのである。

## 2. 研究の目的

韓国において出土した木簡を、中国・日本出土の木簡と比較研究することで、東アジアにおける文字文化の伝播状況を明らかにすることを目的とする。調査の対象となるのは、韓国出土の木簡としては、咸安城山山城から

出土した6世紀半ばの新羅木簡(国立金海博物館・国立加耶文化財研究所蔵)、扶余から出土した6世紀前半から7世紀半ばにかけての百濟木簡(国立扶余博物館蔵)、慶州内の各地から出土した7世紀から8世紀にかけての木簡(国立慶州文化財研究所・国立慶州博物館蔵)などが中心となる。これらの木簡を中国の簡牘や日本の木簡と比較することにより、朝鮮半島において文字文化がどのように受容され変容していったのか、さらにそれが日本列島にどのように伝播していったのかを明らかにする。

中国に木簡使用の源流があるとすれば、中国簡牘との比較を通じて共通点と相違点が明らかにすることで、朝鮮半島においてどのように文字文化が受容され、変容していったかを具体的に明らかにすることができる。それにより、中国文明が周辺諸地域の文化へと広がって受容される際に、どのような変容が起きたのかを具体的に議論することが可能になる。こうした研究成果は、多方面に波及すると考えられ、西嶋定生氏の「東アジア世界論」とりわけ冊封体制と中国文明受容・伝播のプロセスを根本的に再検討することとなる。

## 3. 研究の方法

韓国における最新の出土木簡を調査・研究するために現地研究機関との共同研究をおこなった。具体的な共同調査機関は、実際に木簡の発掘をおこなっている国立加耶文化財研究所、国立慶州文化財研究所などと、調査済みの木簡が所蔵されている国立中央博物館、国立扶余博物館、国立慶州博物館、漢陽大学校博物館である。

木簡の出土地である、咸安城山山城、扶余陵山里・官北里・双北里、慶州月城垓子・皇南洞・雁鴨池、金海鳳凰洞遺跡、仁川桂陽山

城などの調査をおこなった。

#### 4. 研究成果

国立加耶文化財研究所および国立金海博物館において株式会社コンテンツの協力により、城山山城木簡 100 点余りを高精度デジタルカメラによりカラー写真と赤外線写真を撮影した。それぞれの補正作業をおこなった上で、これら 2 種類の写真を並行して同時に観察することが可能なソフトを開発し、WEB 上で公開した。これによって、木簡を実見してはじめて可能であった表面観察を、世界中どこでも誰にでも行うことを実現した。こうした資料のデジタル化によって、木簡の文字情報のみにとどまらず、木簡の製作技法をはじめとする様々な情報の観察を可能とする、これまでにない画期的なデジタル資料として活用を可能とした。

国立加耶文化財研究所において城山山城木簡の調査を実施し、赤外線カメラによる分析を通じてこれまでの釈文を再検討し、新たな釈文を作成した。また、詳細に表面観察を行うことで、製作技法の推定をおこなった。

韓国の扶余・双北里で出土した百済木簡の調査を実施した。その結果、春から夏にかけて官人たちに穀物を貸出し、秋の収穫後に利子を付けて回収する「出拳」の出納状況を記録した木簡であることが分かった。百済において出拳が行なわれていたことを示す資料が見つかったのはこれが初めてであり、社会・経済の実情を伝える重要な発見である。さらに、利率や書式、用語などが日本で出土している出拳木簡と共通することから、百済の文字文化、行政システムが古代日本に与えた影響が明らかとなった。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

李成市「新羅の識字教育と『論語』」『漢字文化三千年』(査読無) 思文閣、2009 年 5 月

李成市「韓国木簡研究の現在 新羅木簡研究の成果を中心に」工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』(査読無)、2009 年 3 月、雄山閣、208～232 頁

橋本繁「韓国木簡のフィールド調査と古代史研究」『史滴』(査読有)30、2008 年 12 月、45～59 頁

安部聡一郎「隠逸・逸民の人士と魏晋期の国家」『歴史学研究』(査読有)846、2008 年 10 月、34～42 頁

李成市「広開土王碑の立碑目的に関する試論」『韓国古代史研究』(査読有)50、2008 年 6 月、ソウル、173～191 頁

平川南「韓国の出土情報」『墨』(査読無)191、2008 年 3・4 月号、28～29 頁

李成市「古代東アジア世界論再考 地域文化圏の形成を中心に」『歴史評論』(査読有)696、2008 年 4 月、38～52 頁

安部聡一郎「『後漢書』郭太列伝の構成過程 人物批評家としての郭泰像の成立」『金沢大学文学部論集史学・考古学・地理学篇』(査読無)28、2008 年 3 月、13～110 頁

平川南「道祖神信仰の源流」『国立歴史民俗博物館研究報告』(査読無)133、2006 年 12

月、317～350頁

三上喜孝「日韓木簡学の現状とその整理状況」『唐代史研究』(査読無)9、2006年7月、38～55頁

三上喜孝「習書木簡からみた文字文化受容の問題」『歴史評論』(査読無)680、2006年12月、53～63頁

三上喜孝「「境界世界」の特産物と古代国家」『歴史と地理 日本史の研究』(査読有)217、2007年6月、1～16頁

李成市「新羅王京の三市について」『古代東アジアの社会と文化』(査読無)汲古書院、2007年3月、423～442頁

李成市「東アジア史の新しいアプローチ「楽浪地域文化」の提唱」『世界平和研究』(査読有)32-4、2006年11月、23～32頁

〔学会発表〕(計 7 件)

安部聡一郎「隠逸・逸民の人士と魏晋期の国家」歴史学研究会大会・古代史部会、2008年5月18日、早稲田大学早稲田キャンパス

李成市「終末期の安羅国をめぐる二三の問題 日本書紀と城山山城木簡の分析を中心に」第14回加耶史国際学術会議『6世紀代加耶と周辺諸国』、2008年4月25日、韓国・金海市)

安部聡一郎「中国出土簡牘との比較研究 尼雅出土漢文簡牘を中心に」国立加耶文化財研究所・早稲田大学朝鮮文化研究所共同研究記念『咸安城山山城出土木簡の意義』学術大会、2007年12月14日、韓国・昌原大学

三上喜孝「日本古代木簡からみた咸安城山山城木簡の特徴」国立加耶文化財研究所・早稲田大学朝鮮文化研究所共同研究記念『咸安城山山城出土木簡の意義』学術大会、2007年12月14日、韓国・昌原大学

橋本繁「咸安城山山城木簡の製作技法」国立加耶文化財研究所・早稲田大学朝鮮文化研究所共同研究記念『咸安城山山城出土木簡の意義』学術大会、2007年12月14日、韓国・昌原大学

李成市「古代朝鮮における漢字文化の受容過程」朝鮮史研究会第44回大会、2007年10月20日、立教大学

佐川英治・阿部幸信・安部聡一郎・戸川貴行「日本魏晋南北朝研究的新動向」、共同発表(三国・西晋部分を担当)、中国中古史中日青年学者聯誼会、2007年8月25日、中国・北京大学中国古代史研究中心

〔図書〕(計 5 件)

早稲田大学朝鮮文化研究所・韓国国立加耶文化財研究所編『日韓共同研究資料集 咸安城山山城木簡』雄山閣、2009年5月

工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年3月、362頁

平川南『全集日本の歴史 第2巻 日本の原像』小学館、2008年1月、355頁

早稲田大学朝鮮文化研究所・韓国国立加耶文化財研究所編『咸安城山山城出土木簡』国立加耶文化財研究所、2007年12月、254頁

早稲田大学朝鮮文化研究所編『韓国出土木  
簡の世界』雄山閣、2007年3月、401頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

李 成市 (LEE SUNGSI)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：30242374

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

平川 南 (HIRAKAWA MINAMI)  
国立歴史民俗博物館・館長  
研究者番号：90156654

三上 喜孝 (MIKAMI YOSHITAKA)  
山形大学・人文学部・准教授  
研究者番号：10331290

安部 聡一郎 (ABE SOICHIRO)  
金沢大学・文学部・准教授  
研究者番号：10345647

橋本 繁 (HASHIMOTO SHIGERU)  
日本学術振興会・特別研究員  
研究者番号：90367144